

<書評>

Sandra Hale and Jemina Napier

Research Methods in Interpreting: A Practical Resource

(Bloomsbury 2013 年)

Pages: 267 pp.

ISBN-10: 1441168516

ISBN-13: 978-1441168511



評者 2014 年度「研究法・論文執筆プロジェクト（アルファベット順に、石黒弓美子、高橋絹子、田村智子、戸谷比呂美、渡部富栄、代表：新崎隆子）」

文責 田村智子（早稲田大学）

「通訳」という名称のクラスが我が国の高等教育機関に初めて設置された 1960 年代から約半世紀を経た 2005 年には、「通訳」科目を掲げている大学・大学院は調査できる範囲で実に 105 校、全 139 科目にのぼり（染谷, et al, 2005: 286）、その後 10 年間にさらに増加している¹。学部レベルでは、現在も主に語学習得や異文化理解としての「通訳」実践練習が中心であるが、それでも学士論文に「通訳」関連のテーマを選ぶ学部生も増えているのではないか。ましてや大学院レベルで「通訳コース」等を設置している教育機関においては、博士前期（あるいは後期）論文は「通訳学」での作成、となることもあろう。その際、学際分野での新学問領域に常に付きまとう様々な問題と格闘する「通訳学」専攻の学生と指導教員にとって、心強い参考書になれそうなテキストが 2013 年に Bloomsbury より出版された。本書の輪読を「研究法・論文執筆プロジェクト（代表、新崎隆子）」は 2014 年度の研究活動の一環として行い、その要旨を以下書評としてまとめた。

本書は、オーストラリアにおけるコミュニティ通訳研究の第一人者で、University of New South Wales 「通訳翻訳学」教授の Sandra Hale とスコットランド Heriot-Watt University の Jemina Napier 教授の共著である。「通訳学」に特化した学術論文・研究方法の実践的指南書であり、平易な解説と具体的な例題を通して、通訳研究の手法を実践的に習得することができる。学位論文研究法に関する教科書は常に数多く出版されてはいるものの、特定の専攻分野を対象にしていないものが多く、読者にとっては往々にして、自らの分野に参考になる内容とそうでないものを常に選別しながら応用していくもどかしさがある。その点本書は、まさに「通訳学」に照準を合わせた特別仕様

TAMURA Tomoko, "Book Review: Research Methods in Interpreting: A Practical Resource," *Interpreting and Translation Studies*, No.16, 2016. Pages 165-168. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

とも言えるもので、使い勝手は格段に良いのではなかろうか。

全8章構成で、第1章「What is research and why do we do it」の通訳研究の意義や目的、研究方法の種類と特徴、それに第2章「Critical reading and writing」の先行研究の調査方法や倫理面での注意事項は、他分野とも共通する内容である。第3章から第7章までが通訳研究に特化した手法別の具体的な解説となる。

第3章「Questionnaires in interpreting research」では、通訳学のみならず様々な分野で幅広く使用されている「アンケート(質問紙)」手法の解説である。目的や取得できる情報(回答者に関する情報、行動パターン、意見や考え方)と取得できない情報(意見や考えの正しさの検証)、留意点、そしてリッカート尺度を含む様々な質問の種類や具体的な質問文の作り方などを説明。また、パイロット調査の利点、サンプル抽出法の種類と妥当性の確保、インターネットを用いたアンケート調査の長所・短所、そしてどのようなデータなら量的手法を用いた統計処理が可能かを解説し、p値や有意水準等の統計処理の基本にも触れている。

第4章「Ethnographic research on interpreting」は、人類学の研究手法として誕生し今や質的研究の中核をなすエスノグラフィ手法の解説である。データ収集から bottom-up 式に行う帰納的手法は、手間暇はかかるが得られる情報には「深さ」と「厚み」があり、特に triangulation (他の手法と混合することで結果をより立体化させること)でさらに妥当性、信頼性、信用性を高めることができるとし、当手法に基づく代表的な通訳研究の例も紹介。エスノグラフィ応用の代表格である「インタビュー」手法を、参与型・非参与型、フォーマル・インフォーマル、またフォーカスグループの例を挙げながら詳述している他、ケーススタディ(研究者自身が通訳者の場合、自分自身もアクション・ケース・スタディの対象になり得る)も詳細な分析を行うことにより重要な質的研究になり得ると説く。また分析ツールとして N-Vivo や ELAN の使用を紹介。

第5章「Discourse analysis in interpreting research」では、特にコミュニティ通訳研究で重要な役割を果たしている DA (談話分析)の解説で、まず DA 自体の理解のため言語学における DA の主要文献を読んだ後、DA 手法を用いた通訳研究の主要文献を読むべしと説く。DA は幅が広く多種多様な手法が可能なので解説は容易ではないとしながらも、ポイントを押さえ例題や実例を通して分かりやすく解説している。top-down の演繹的、量的手法と bottom-up の帰納的、質的手法の2通りの基本アプローチを解説し、どのような分析単位が可能か(談話者の発言自体の個別分析、通訳者を含む談話者間の相互作用の分析、起点言語と通訳された目標言語の比較分析、あるいはこれら3つの混合)を説明。またデータの種別(実録か模擬実験か)とその使い分けや、データ書き起こしの具体的な手法まで踏み込んで解説している他、最近の会議通訳研究でも用いられてきているコーパスを用いた談話分析にも触れている。

第6章「Experimental methods in interpreting research」は特に「同時通訳」という行為の認知心理学や心理言語学からの分析で広く用いられてきた実証実験に基づく量的手法の通訳研究の解説で、まず量的研究の基本概念や用語(実験群・統制群、独立変数・

従属変数、仮説・帰無仮説、p 値・有意水準、信頼性・妥当性、など)を初心者にも分かりやすく解説している。通訳研究における実証実験の活躍の場としては、やはり「同時通訳」の言語処理における「過程 (process)」、「訳出文 (product)」、「経験や訓練 (expertise)」等の分析に最適であるとし、具体的な例として「通訳時間と訳出文の質 (正確さ等) との関係」、「EVS (ear-voice-span) に変化をもたらす要因」、「作業記憶・短期記憶・長期記憶の相互関係」、「訳出術として、省略、追加、予測、推測、圧縮等が起こる仕組み」などを挙げている。

第7章「Research on interpreting education and assessment」は、「通訳技能訓練」や「通訳学」の教育を施す機関における教育法や教育学に関する研究の章で、冒頭で「通訳教育研究」に関する独立した章をあえて本書に設けた理由を説明。どうしても各教師個人の経験や直観に基づいて行われがちな通訳訓練や評価において、実証研究の果たす役割の重要性は今後さらに高まっていくと説く。まず、成人教育における教育哲学理論の枠組みの説明 (批判理論、実証主義・解釈主義、ポスト構造主義、社会構成主義、等) をし、全体的な流れとしては「教師中心」から「学習者中心」へのシフトが進んでいる、とした後、通訳教育研究における具体的な手法 (調査、自然主義的・質的手法、実証実験、歴史・記録文書の文献研究、ロール・プレイ、アクション・リサーチ、等) を解説。後半では、具体的な研究計画の作成法を具体例を用いて解説。目的別にどのような研究手法が可能かを例示し、調査内容、データの種類、収集方法、分析方法を一覧表で示すことにより、読者は3章から6章まで学んだ各手法の研究全体像における主要な応用分野や各手法間の相互関係をより立体的に把握できる。最後に通訳教育に関する最近の主要研究例の解説と考察を行っている。

最終章である第8章はこれから通訳研究を行いたいと考えている読者への助言の章となっており、興味のある分野や手法に基づいた教授や大学院の選択法から、学位論文や出版の最近の潮流まで、かなり具体的なポイントにまで踏み込んだ有用な情報を提供している。興味深い点として、他章でもその重要性を指摘している「混合研究法」(mixed method)、すなわち「手法を混合することでデータをより立体化 (triangulation) してその妥当性や信頼性を高めていく方法」が、従来の「量的手法」、「質的手法」に続く第3番の独立した手法になりつつあるのではないかと Johnson, et al (2007)² を引用しながら述べている点である。この点に関して、本プロジェクトが活動の一環として早稲田大学大学院の佐渡島沙織教授を招聘して行ったワークショップでも、佐渡島教授は手法の混合により「研究結果がより立体的」になる、とその効用を強調していた。

以上、2013年出版の Research Methods in Interpreting: A Practical Resource の要旨をまとめた。Hale は2007年の力作 *Community Interpreting* (Hale, 2007) でも7章 (Main Traditions and Approaches in Community Interpreting Research) と8章 (Conducting Research in Community Interpreting) の二章をさいて通訳研究に関する有用な解説をしているが、本書はそれをさらに拡大・充実させた「通訳研究」の包括的な指南書となっている。

「通訳学」の教育現場での活用が期待される。

.....
【評者紹介】

田村智子 (TAMURA Tomoko) 早稲田大学大学院国際コミュニケーション研究科、東京外国語大学大学院総合国学研究科非常勤講師。ミシガン大学言語学修士、ハーバード大学法律学修士、現在立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程在籍。専門は「日英」の同時通訳及びウィスパリングの訓練及び司法通訳研究。
.....

【注】

1. 例えば秋田国際教養大学では、2008年に専門職大学院「グローバル・コミュニケーション実践研究科」を設置した際に、「発信型実践領域」の科目として「通訳技法 I (Interpreting I)」と「通訳技法 II (Interpreting II)」を開設している(同校ホームページ <http://web.aiu.ac.jp/about/history>、及び <http://web.aiu.ac.jp/graduate/curriculum> より)。また2012年新設され、同様にすべての授業が英語によって行われている早稲田大学国際コミュニケーション研究科でも、「言語コミュニケーション」専攻の一角として「通訳学 (Interpretation Studies)」を設けている。2014年には関西大学外国語教育研究科で「通訳翻訳学領域」が新設されている。
2. 第8章210-211頁の記述では、著者は「データの立体化 (triangulation)」と「混合研究法 (mixed method)」の厳密な用語上の区別はしていないが、引用された Johnson, et al (2007) では、「データの立体化 (triangulation)」を「混合研究法 (mixed method)」がもたらす効用の1つ、ととらえている (Johnson, et al: 115, 127)。

【引用文献】

- Hale, S. B. (2007). *Community Interpreting*. Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Johnson, R. B., Anthony J. Onwuegbuzie, and Lisa A. Turner. (2007). "Toward a Definition of Mixed Methods Research." *Journal of Mixed Methods Research*, 1 (2), 112-133.
- 染谷泰正, et al. (2005) 「わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査」『通訳研究』第5号: 285-310.